

巻 頭 言

黒田多美子

研究報告集『BRÜCKE』第31号の刊行をお祝いいたします。執筆者のみなさま、ならびに編集に尽力された方々、ご苦勞様でした。

私はこの三月で退職しますが、ほぼ半世紀前には学生でした。その頃はまだに忘れられない言葉と遭遇したことが強く印象に残っています。大学2年か3年の「史料購読」という授業の試験の時でした。A4版で約半ページくらいの英文が提示され、「文中の *beyond the barricade* という言葉の意味を論ぜよ」という設問が出されました。出題文の細かい内容はもう覚えていませんが、パリコミュンについて書かれたものだったと思います。今振り返ると、当時は分かっていなくてもわかったつもりになって、あるいは分かったようなふりをしてレポートを書いていたし、この時も適当に「論じた」と思います。しかし、この言葉は、試験が終わってもずっと私の脳裏から離れることはありませんでした。今でも折に触れて、「バリケードの向こう側に」あるいは「バリケードを超えて」の意味はなんだっただろうかという問いが頭をもたげてきます。特に、自分自身の判断を迫られる時にはこの言葉がキーワードになります。このキーワードに惹きつけられて、私は、「自分はバリケードのどちらの側にいるのだろうか」ということを自問せざるを得ないのです。

また、歴史を専攻するにあたって読まされた本の一つに、E.H.カーの『歴史とは何か』がありました。著者の博覧強記に圧倒されつつ、またこれもわかったようなつもりになってレポートを書きましたが、その後読み返してみるとその時々にかかる部分とわからない部分が交錯します。その中で核となっているのは、歴史とは解釈であり、歴史家はどのような立場に立つのか

常に問われている、という点です。

日本では、「中立」であることが重視されるようになってきました。しかも、日本では一般的に「中立」とは、「事実を淡々と述べる（並べる）」ことを意味しているようです。そして、自分の立場を表明しないほうが学問に客観性を担保できるような雰囲気醸成されています。歴史研究において、かかる「中立」は曲者です。カーも“Historian and His Facts”（日本語訳本では「歴史家と事実」で His が抜けています）というタイトルで一章を割いています。歴史家は収集した「彼の事実」に基づいて解釈をしなければならないし、そうすべきである、というのがその趣旨です。もちろん恣意的な解釈を促しているわけではありません。誠実に学問的追求心から渉猟した史料＝「事実」に基づいて解釈を下すことの重要性を説いたものです。カーの主張が、日本的な「中立」の考えにつながることは明瞭でしょう。

最後に、同じくカーの次の一節を、これから研究を進め、論文をまとめていくみなさまに贈りたいと思います。

私たちの質問に答える受験生が得々として、ロシア革命について一ダースばかりの原因を一つ一つ挙げ、それでお仕舞いにしたら、中にはなれるでしょうが、上になるのは難しいでしょう。多分、「知識は十分だが、想像力は不足」というのが試験官の評語になるでしょう。